

2023年12月の総評：木下龍也

哲学で都会の色を見上げれば おれのなんにも無さが 飛行機／白野

自身の空虚さに辿り着きそうだった主体の思考が、たまたま目に映った「飛行機」に奪われている。考え事をしているときに、現実（車や犬や怒鳴り声やバナラバナ高収入の音やカレーの匂いやアンモニア臭など）が五感のいずれかに割って入り、思考が中断されることはよくあるが、見逃してしまいがちなその一瞬を見事に捉えた歌だと思う。結句に置かれた一字空けは、思考が中断され意識が切り替わる様子を表現しつつ、読者が「おれのなんにも無さが」「飛行機」のようだという比喩の読みに流れないようにしているのだろうからとても有効な配慮だと思う。

川は急に深くなるから気をつけて と振り向きながらおぼれていった／ひろみ

第三者から見れば「川は急に深くなる」ことを事前に知っているインストラクター的な存在が注意を促すことに気を取られて「おぼれて」しまうという滑稽な歌に思えるが、主体の立場から見ればガラリと印象が変わる。「おぼれていった」ということはおそらく流されてもいるのだろう。主体は「おぼれ」ながら遠くへ流されていく人物をただわなわなしながら見ていることしかできない。助けたいが助けられないという無力感や恐怖。それはテレビの、パソコンの、スマートフォンの画面越しに、我々の日常にも溢れている。

おっばいに酔をふりかけて おっばいが酸っぱい

（何を信じればいい？）／大嶋碧月

「信じ」ていたことが「信じ」られなくなったときに人は、何を「信じればいい」のかわからなくなる。「酔をふりかけ」た「おっばい」は当然「酸っぱい」はずなのに、なぜ「（何を信じればいい？）」と思ったのだろう。ヒントになりそうなのは改行による間だ。この間で興奮が冷め、俺は一体何をしているんだ、と思った。「おっばい」に「酔をふりかけて」しまうのなら、他にも「信じ」られないことをしてしまうのではないか。そんなことをするはずがないと思っていた俺を俺が「信じ」られなくなる。それゆえの「（何を信じればいい？）」なのかもしれない。

でも無職やからと友は会うたびに 言う会うたびに言う ねえ桜／あお

「無職」に引け目を感じているから、かわいいね、あれ食べようよ、今度あそこに行こうよ、などへの返答が「でも無職やから」という自虐になるのだろう。それを「会うたびに言」われる主体には、かわいそう、切ない、やめてほしいなどの様々な気持ちが少しずつあるはずだ。けれど主体はそれらを「友」へ伝えるのではなく、「桜」へ「ねえ」と投げかける。「桜」が咲いて散るように、「無職」である状態もいずれは過ぎ去ることだとわかっているからだろうし、自分が「友」にとって「でも無職やから」と感情を吐き出せる相手であり続けるためだろう。主体の優しさが滲み出ている一首だと僕は読んだ。

あなたへと溢れる虹はおさえつつ 赤だけをペンの形で渡す／穴棍蛇にひき

「虹」が主体の内に湧き上がる色々な感情の喩だとしたら、「赤」はそのうちで最も目立つものや最も外側にあるものを指していたり、情熱や愛を指していたりするのかもしれない。「ペンの形で渡す」ということは、受け取ったその感情への「あなた」の言葉がほしい、あるいは、「赤」を入れると言うように、その感情について添削してほしい、ということなのかもしれない。意味付けをするならこれもひとつの読み方ではあるだろう。けれど、意味付けはあまり重要ではない。この歌は現実では再現できない幻想的な映像を臉の裏に投映してくれて、「溢れる」詩情に浸らせてくれるのだから。

われもののあなたをゆらす 抱いていた 銀河にこころをもらってもらおう／まちりこ

「われもの」＝こわれやすい存在であろうから「あなた」＝赤ちゃんだとすると、親が生まれたばかりの子をあやしているシーンにも思える。そうすると「あなた」＝「銀河」となり、赤ちゃんという可能性や未知に満ちた自然寄りの存在に、感情や意志を持たせて、人間に近づけていく過程を描いているというふうにも読める。けれど、「あなた」＝老人や恋人であるパターンも、「あなた」＝「銀河」ではないパターンも、「あなた」の「こころ」を「銀河」へ渡しているパターンも、「銀河」から「あなた」へ「こころ」が渡されているパターンもあり、読みの広がりには銀河的である。正直わからないのだが、だからこそ惹かれた。

墓石に「v」だけ刻まれるきつと ペーストしたかったはずの何か／平山

Macでは選択した項目をCommand+Cでコピーして、Command+Vで「ペースト」するのだが、Commandを押し損ねて書類などに『「v」だけ刻まれる』ことが稀にある。こういったミスがパソコン上ではなく現実に存在する物体としての「墓

石」にも表れてしまうということは、依頼者が直接機械へ指示をすることで、「墓石」に文字を彫ることができる未来の出来事なのだろう。少子高齢化が進んだ先には全然あり得る話だ。ミスがミスのまま、死者を弔うための「墓石」にまで適用されてしまうほどに人間が少ない未来を想像して、怖くなってしまった。

独り言増えて金魚が一つ浮く／玻璃

「独り言」が「増え」る、というのは「金魚が一つ浮く」という結果に至るまでの過程のひとつに過ぎない。「独り言」が「増え」るの前には不安や孤独感が大きくなる、があるだろうし、「金魚が一つ浮く」の前には通常時には怠らなかつたはずの「金魚」へのケアができなくなる、があるだろう。けれど、定型に収めるために時間の流れの一部を切り出すことで、「独り言」が「増え」ることが「金魚」の死に直結しているような恐ろしさを見せながら、省略された部分を想像させて、読者をこの句に引き込むための余白を生み出しているのだ。何を書かないか、という選択が巧い。

まあなんか

で始まる文しか返せない／小宮颯人

適当な言葉を送っている、ということではないだろう。断言を避け、自分の意見があつたとしても曖昧にするための「まあなんか」である。何か意見を求められたとき、YESかNOか、0か100かのどちらかに傾きすぎないようにふんわり伝え、最終的な判断は相手に委ね、肯定も否定もしやすいようにしておく。否定をされたときには真に受けなくて済む。互いの距離を保つための、互いに傷つかないためのクッションなのだ。「まあなんか」は、ある面から見れば優しさであろうし、別の面から見れば弱さでもあろう。主体は後者を痛感しているのだと思う。

大勢の中のあなたに届け風邪／中村航太

「届け」ということは、別のどこかからやってきた「風邪」ではなく、いま主体がひいている「風邪」が「あなた」にうつってほしいという願いなのだと思う。

「風邪」は咳や鼻水という症状として表れるから、言葉や気持ちよりも「届」いたかどうか観測しやすい。この願いが恨みや憎しみによるものでも、好意によるものでも、叶ったかどうか、例えば「あなた」が電車や会社で毎日会う他人であれば、いつかわかるのだ。「あなた」の「風邪」に狙いを決めて♪ベンザブロック♪ではなく、「あなた」に狙いを決めて放たれる咳や鼻水。おぞましくて好きだった。

以上です。たくさんのご投稿ありがとうございました。

1月のご投稿も楽しみにしております。

木下龍也